



## 12月の園芸相談 Q&A

### 花壇の鍬起こしと肥料やり

Q. 冬の間には花壇の土の手入れをしようと思います。その方法を教えてください。

A. 枯れた草花などを取り除き、深耕（天地返し）をして肥料を施しておきます。

《ポイント》

立派な花壇をつくるには、冬の休みの間に深耕をして、土を寒さにさらし、下層に腐葉土や堆肥を深く混ぜ、土の通気性をよくすることが大切です。

#### 1 花壇の鍬起こし

年末から正月は庭の清掃の時期でもありますが、花壇の中の枯れた草花などは早めに根をつけたまま掘り取り捨てます。もし、根にセンチュウや白い菌糸がついていたら土の本格的な消毒をしないとイケません。

長い間、続けて使った花壇の場合は、表土を下に、心土を上に出す、天地返しをします。深く掘れない花壇では60cm位の深耕をして、底のほうに腐葉土や堆肥をたくさん入れると水はけがよくなります。上土30cmの深さに石灰チツソを1㎡当たり150g施すと、チツソ分の施肥とともに多少、土の消毒になり、モグラよけにもなります。

花壇の下層には堆肥と有機物の肥料を入れます。1㎡当たり堆肥2kg、鶏糞200g、石灰、油粕、魚粉を各々100gほどが標準です。いま、これらを与えておくと春までには肥料分が土に吸われて、来春、苗を植えたときに勢いよく育ち始めます。もし、草木灰が手に入れば、苗の定植のときに表土に混ぜてやるとカリの補給ができます。

このように有機質の肥料をたくさん施すのは楽な仕事ではありませんが、化学肥料だけを使う場合よりも、健康に育ちます。葉や莖がよく充実し、徒長せずに、立派な花が楽しめます。

#### 2 冬花壇の肥料やり

チューリップ、スイセン、ユリなどの秋植え球根は、まだ、芽を出していないかもしれませんが、地中の芽や根は今年の準備をしているときですから、芽を傷めないように雑草を抜いた後に油粕と木灰を1㎡当たり80gくらい施します。油粕の代わりに化成肥料の1000倍くらいの液肥を与えてもよいでしょう。

宿根草花のカスミソウ、ガーベラ、アルメリアなどは、株の片側を浅く掘って1000倍の液肥や化成肥料を施します。化成肥料は成分が濃厚ですから、生育障害を避けるために、1㎡当たり70gくらいにして、早春に再び同じ量を施すようにします。

開花中のパンジーなどには化成肥料の1000倍の液肥を月に2回、水やりをかねて施します。



## 12月の園芸相談 Q&A

### ハイビスカスの冬越し

Q. 温室もフレームもありますが、冬越し出来ますか？

A. 最低温度を8℃に保てれば、成長はしないまでも葉を落とさせずに越冬させられますが、5℃では難しいでしょう。

《ポイント》

ハイビスカスの越冬温度は熱帯植物の中でも高いほうで、冬も成長を続けるには、最低15℃が必要です。

#### 1 温度

冬の室内最低温度は普通の家で5℃以下、保温性のよい建物で8℃くらいに下がります。

なるべく暖かい部屋において、夜間はビニルをかけるなどして、冷たい夜気に絶対当てないようにします。

5℃まで下がると葉は落ちて、どうにか枯死させないで持ちこたえるのが精いっぱいです。



#### 2 水と肥料

寒い間は午前中の暖かい日光が当たっている間に、夕方までにほぼ乾く程度の水をやりま

す。最低15℃であれば、毎日水をやりませんが、8~10℃ならば3日に1回くらい、5℃なら7~10日に1回くらいとします。低温の時期に水をやりすぎると枯れてしまいます。

低温期に肥料をやりすぎるのも失敗のもとです。5℃しか保てなければ肥料は寒い間は全く与えません。8~10℃で1か月に1回、15℃で1か月に3回くらい、薄い液肥を与える程度にします。

#### 3 日光

ハイビスカスは日光に当たらないと生きていられない植物です。日中はなるべく窓辺に置き、十分に日光に当てます。ただし、ガラスに近づけすぎると日焼けを起こすので、ガラスから40cmくらい離します。ビニルも昼には外してやります。

#### 4 系統

大輪、豪華で花色が豊富なハワイアン・ヒビスカスは耐寒性が弱く、冬越しは温室でないと無理です。中輪、多花性のオールド・タイプとよばれる品種は寒さに比較的強く、霜のあたらない軒下などで冬を越す場合もあります。